

第38回 フォッサマグナ！

IT生

先日、高校生を相手に四方山話をした。

そのなかで、ものの考え方として、以前本欄に書いた、大阪北部地震により倒壊した高槻の学校の塀の話をした。かいつまんでいうと、塀を危険と認識しながら撤去しなかった行政を批判するよりも、事前に住民自身が危険を認識するべきだったと考えるべきではないかと、高校生に問うた。



秋の夜長にお勧めの一冊です

すると、ひとりの高校生が「自宅が現場に近いが、うちの母親は、『あれが倒れると思わなかった』といていた」と反論してきた。で、「君は、高槻の地震のハザードマップを見たことはあるのか」と聞いたら、「ない」という。そこで、「高槻には地震で断裂した古墳が保存されている土地柄だ。そういった基本情報を知らなければ、塀が危険かどうかは認識できないだろう」と諭しておいた。

その帰り道、本屋にたちよったら、講談社ブルーバックスの「フォッサマグナ」が平積みされていたので、手にとったら面白く、帰りの電車のなかで一気に読んでしまった。

フォッサマグナが、地質学上、東西日本の境界であるらしいことぐらいは知っていたが、海溝にも匹敵するぐらいの深さ（6000メートル以上）の溝らしいことや、東西の日本列島が、プレート運動にのって、しかも、回転しながら、ユーラシア大陸ふきんから南下し、いくなれば、合体したその痕跡とも考えられるという。

しかも、大陸移動説を唱えだしたのは、寺田寅彦師だという。

足下をみよ、と高校生にいったものの、我が身をかえりみて、不明を恥じた次第だが、本によると、現在のところ、諸説が飛び交っているだけで、本当のところはまだ未解明だという。

ただ、少なくとも、日本列島はプレート運動が生んだ、世界でもまれにみる「じゃじゃ馬列島」であるらしいことはよく分かった。

ゆくゆく、5000万年後には、米国ハワイと合体するらしく、名前まで「アメイジア」（アメリカ+アジア）とついているとは、地質研究者の気の長さに驚いた次第だ。

（平成30年9月）